

## ふんがのお勧めの本

- ・ この文書は、読書家ののだちゃんの薦めで書いたもので、100冊まで選ぶと思ったのですが、挫折して、工事中のままオープンします。
- ・ 原則として読み返し無しで、飛行機や電車の中で書いています。それだけ読み込んだものだけになっています。このため、記憶違いがあるかもしれません。ごめんなさい。
- ・ ふんがが面白いと思ったものしか含まれていないので、ジャンルは無茶苦茶です。怪しげな本も含まれています。中国モノでは字が出なかつたりしてます。偏見に満ちていますが、基本的に好きなものばかりなので、あまり悪口は書いていないつもりです。

### ① 「忘れられた巨人」 カズオ・イシグロ

ノーベル賞により一気に認知度を増したカズオ・イシグロの最新作。原題は Buried Giants なので埋められた巨人が正しく、小説中巨人は忘れられていない（忘れられちゃったのはヤギ（毒））ので、本当はこの題はおかしい。しかし、竜の吐く霧によって引き起こされる記憶の喪失がテーマなので名訳なのかもしれない。カズオ・イシグロの作品には① どう考えても設定がおかしい。② 主人公の考え方にも共感できない。③ にも関わらず、文章力の凄さで引き込まれてしまう。という共通の特徴がある。メインプログラムを実行中に割り込みが掛かり、この処理中にさらに多重割り込みが掛かって戻れなくなってしまう感じで、これは悪夢に良くあるパターンである。悪夢感がすごいのが「私たちが孤児だったころ」で、このレベルだと読んでいて苦しくなってくる。「充たされざる者」は多重割り込み戻れない感が満載かつ無茶苦茶長いため、読んでいると頭がおかしくなり日常生活に影響する。これはあまりお勧めできない。世評の高い「私を離さないで」は、悪夢感が中途半端なため、突っ込みを入れたくなくなってしまい、あまり乗り切れなかった。「日の名残り」は、悪夢感がほとんどなく、読みやすかったが印象がやや弱かった。この忘れられた巨人はファンタジーベースなので、すんなり入っていけ、冒険小説の一面があり、戦闘シーンもある（この辺がオールドファンには評判が悪いようだ）。ゲームやファンタジー好きの若い読者も楽にはまっていけるのではないかと思う。ラストも見事である。独特の引き込まれ感もあり、ふんがはこれに読んでいて2回駅を乗り越したので注意が必要。

### ② 「世界の終わりとハードボイルドワンダーランド」村上春樹

ふんがは原則として文庫本しか読まないし、図書館で借りることもしない（食べながら読んだりするので汚す危険性がある）ので、ハードカバーで買う作家は村上春樹と塩野七生の長編のみである。これは絶対に元が取れることと、中々文庫本が出ないためである。村上春樹の作品の中では、これが一番好きで、② 海辺のカフカ（もっともクトゥルー的な話）、③ アフターダーク、④ 羊をめぐる冒険、次は 田崎つくるかスプートニクの恋人の順。

最新作の「騎士団長殺しは」ランキングの相当下に位置するが、それでも面白い部分はあ

った。ちなみに「村上朝日堂」の系列の随筆も面白い。

2つの世界が交互に語られるこの小説ではやがて両方の世界が交差する。どの部分も隙がなく、一気に読めるし何度繰り返してもいい。さあ、やみくろよけにクリップを持って冒険の旅に出よう。

### ③ 「わが友マキアベリ」 塩野七生

塩野七生の歴史エッセイでは、もちろん「ローマ人の物語」が優れている。特にふんがが好きなのは「ハンニバル戦記」「勝者の混迷」「危機と克服」の3つ。「ユリウスカエサル」は、カエサル愛がすごすぎて付いていけない所もあるのだが、もちろん面白い。とはいえ、お勧めするには長すぎるかもしれない。最新の「ギリシャ人の物語」も、お勧めするには長すぎるかもしれない。最新の「ギリシャ人の物語」はアレキサンドロスが文句なく恰好いいし、エパミノンドスの斜行陣の意味がはじめてわかった。時流に乗るという意味ではお勧めだが、流に乗るという意味ではお勧めだが、Iから読むとちょっと大変かもしれない。ベネチアを描いた「海の都の物語」もイタリア旅行前には読んでおきたい所だが、ふんがは閉鎖的貴族主義で高いインテリジェンス能力を誇るベネチア共和国が今一つ好きになれないところがある。はじめて読むならお勧めなのがルネサンスのフィレンツェを描いたこの作品である。マキアベリズムの元祖のこの人物が祖国愛に溢れた熱い男であったことがわか品である。ラストは泣かせる。「チェーザレボルジアあるいは優雅なる冷酷」「神の代理人」も併せてお読みになることをお勧めする。ちなみにより小説っぽいのがお好きならば、「コンスタンティノーブルの陥落」「ロードス島戦記」の3部作がいいかもし部作がいいかもしれない。

### ④ 「空海の風景」 司馬遼太郎

司馬作品はどれも質が高く、はずれがない。有名どころを一言ずつ紹介する。

まずは幕末明治もの。

「竜馬が行く」日本中に竜馬ファンを広めた決定版。書かれてから多くの新資料が発見されても内容的にはおかしな点はまったくない。

「坂の上の雲」小説として読ませるのは子規が死ぬまでで、後は日露戦争のスケールの大きさ、膨大な人と資料に飲み込まれていくが、それでも主人公の秋山兄弟は存在感を保っている。

「翔ぶが如く」坂の上の雲と並ぶ超大作で、川路利良を主人公に西郷隆盛を描く試みが面白いが、西南戦争の悲惨さと、ついに西郷がつかみきれないもどかしさで暗い作品になっている。になっている。

「燃えよ剣」これも日本中に土方ファンを広めた決定版。新選組の隊士のイメージを決定づけてしまった所がある。「新選組血風録」も併せて読みたい。斉藤一ファンは諾齋と混同されて不満かもしれない。

「花神」理系っぽい村田蔵六さんは個人的に好感度が高い。われらが福沢先生がどちらかというとなら敵役で登場するが、この立ち位置も大変面白い。

「世に棲む日々」やはり司馬さんは薩摩よりも長州に親近感があったようで、吉田松陰と高杉晋作を描いたこの作品は視点が温かく、主人公たちが格好いい。「十一番目の志士」も併せてよみたい。も併せてよみたい。

「峠」河井継之助はこの作品のためにファンが多いが、誰も得にならない戦争で多くの血を流したという点で好きではない。しかしこれを読むと共感できてしまうところがある意味凄いい。

「歳月」江藤新平を描いた作品で、司馬作品の中ではマイナーだが、読まないのは勿体ない。法治国家確立のため輝いている前半と反乱を起こしてからのへたれっぷりの差を考えるとやはり人間、時と場所を得ないとダメなのか。

次は戦国もの

「国盗り物語」「関ヶ原」「城塞」有名な戦国三部作。2017年になってもまだ映画が出来ちゃう「関ヶ原」は定番の魅力がありラストが優れているが、なんといっても面白いのは「国盗り物語」で、特に斉藤道三編が好き。

「新書太閤記」秀吉の明るい面を徹底的に描いた作品。バランスを取るために山田風太郎の「妖説太閤記」を併せて読むのがお勧め。

「箱根の坂」北条早雲を「今様」ミュージカルに描いた作品で、悪い所も多分に持つ人なのに、明るく味わいがある。

「霸王の家」司馬作品では悪役で登場することの多い家康を主人公に据えた作品で、苦難の時代だけを拾って焦点を当てている。実は大変な傑作。

「播磨灘物語」関ヶ原や国盗り物語では脇役で良い味を出した黒田官兵衛を祖父の時代から描いた傑作。ひとつだけ不満があるのはキリスト教についてで、官兵衛にとってキリスト教入信は知的好奇心で後にあっさり棄教しちゃったとある点。これは子供の長政によるキャンペーンに騙されていて、本人は最後まで信仰を守ったと考えている。

「尻くらえ孫市」エンターテイメントという点では最高の傑作。快男児雑賀孫市が縦横無尽に活躍する。

「功名が辻」司馬作品は作者が前面に出すぎなのが歴史小説としての欠点だが、この作品は主人公の夫婦があくまでも主体的で、テーマが一貫して歴史小説としてよくできている。実際の山内一豊はこのような人物ではなかったと思うけど。

「戦雲の夢」「夏草の賦」長曾我部盛親、元親を描いた作。信親を失った元親の悲劇は、盛親の悲劇に繋がり、土佐の郷土階級を産んで竜馬までつながっていく。元親の晩年は悲惨すぎるため、最後にひと花咲かせた盛親を描いた「戦雲の夢」の方が読後感がいい。

他にもいろいろ

「項羽と劉邦」（原題の漢の風、楚の雨の方が絶対良かった）は、こんなことは古代中国では、なかったんじゃないか、とか思いつつ、しかし面白く読んでしまった。

「韃靼疾風録」清を建国したヌルハチ、ホンタイジ、ドルゴンを日本から渡海した平戸藩士の目から描いている。他と比べて名作とはいえないのかもしれないが独特の雰囲気がある。「妖怪」京に妖怪が徘徊する室町時代を描いた作品で、司馬遼太郎最大の失敗作と言われているのだが、独特の魅力がある。

「風神の門」霧隠才蔵を描いた初期の忍者もの。山田風太郎が絶賛したが、後に王道歴史小説路線に進んでしまって大変がっかりしたという話が伝わっている。「胡蝶の夢」「菜の花の沖」などもお勧めで司馬さんって本当にすごい。

さて、このようなすごい作品群の中から一作選ぶならば「空海の風景」で、これを読むまで密教に関して完全に誤解していたことがわかった。平城、桓武、嵯峨時代の状況も良くわかった。スケールの大きいグローバルな巨人であった空海が日本人に生まれてくれてよかったとつくづく思った。西安の青龍寺に行って「慧果から伝承を受ける空海像」も見えてきた。空海は密教を学ぶにあたって「虚空蔵求聞持法」から入っている。この経はどうやら記憶管理プログラムに当たるらしく、膨大な仮想記憶空間を実現する。記憶システムから入る所は流石である。また、この作品に出てくる最澄がとても魅力的である。

#### ⑤ 「孫子」海音寺潮五郎

海音寺潮五郎は、歴史に題材をとった歴史小説と、史実と考えられるものに完全に準拠した史伝を明確に分けていた。創作が入る歴史小説を書く場合も、安易な解釈で歴史上の人物を貶めることを嫌った。このためかどうか「天と地と」「平将門」などの歴史小説よりも「武将列伝小説よりも「武将列伝」「悪人列伝」「列藩騒動録」などの史伝の方が断然面白い。史伝の最高峰は鹿児島出身の海音寺さんが最も愛し、尊敬していた「西郷隆盛」なのだが、あまりに愛し、時間をかけ過ぎ、そのうちに健康を害してしまい未完に終わった。残念だが、死期が迫った中で最後に書いた部分で西南の役でなぜ西郷があのような行動をとったのかという解釈は大変納得が行くものだった。(司馬遼太郎の翔ぶが如くでは、ついに解釈を示せず、拳句の果てに「頭を打った」など生理的な説まで紹介している)

さて、「孫子」は歴史小説であるが、例外的に？とても面白い。春秋時代に呉の闔閭を助けた孫武と、その子孫で戦国時代の孫びんをそれぞれ別の長編として描いている。「孫武編」は「兵法」の研究は大好きだが好戦的ではなく、栄達に興味のない孫武、ひたすらに熱い男伍子胥をはじめとする人物のキャラクターが素晴らしい。「孫びん編」は、孫びんのライバルのほうけんに同情してしまう。やはり天才には勝てないものか。

#### ⑥ 「ムーミン谷の冬」トーベヤンソン

ムーミンシリーズは人気が高いが、原作は結構難解なのが多く若い頃読んでさっぱりだった話が後で納得が行ったりする。ムーミンファンの人たちは、ちゃんと読んでいるんだろうか？ふんががランキングするならば「冬」「彗星」「パパ海に行く」の順だが、最近「仲間たち」の良く分からなかった話のうちいくつかは実は凄いいんじゃないかと思うようになって

た。しかし、この中で「冬」は断然他を引き離して優れている。冬眠から醒めてしまったムーミントロールが、日の昇らない北欧の冬を越す話で、太陽が昇らず、海面が凍り付く壮絶な夜の世界で、モラン、流しの下に住人、ご先祖さま、雪の女王など幻想的なキャラクタと交流する。冒険への案内人は、「彗星」のスナフキンに代わって、やや意地悪な見えるところのある「おしゃまさん」で、相棒は、スニフではなくニヒルでクールなミイなので、ムーミントロールも意気が上がらない。しかし、多彩なキャラクタと交流し、冬の世界の死と再生を体験し、主人公は成長する。中でも異彩を放っているのはヘムレンさんで、俗物揃いのヘムルの中でもひとときKYなこのキャラクタは、ムーミントロールと全く感性が合わず、他の住人にも嫌われている。しかし、物語が進むにつれ、印象が変わっていき、最後は、はいむしのサロメちゃんを助け出し、犬のめそめそのピンチを救って三人で冒険の旅に出る。もはやヒーローのノリである。このトリオが他の話に登場しないのは残念だ。ちなみにスナフキンは、「渡り」をするムムリク（「楽しいムーミン一家」では冬眠していたので、やればできるらしい）なのでこの話には出てこないのだが、「居ない」ということで重要な役割を果たしている。

#### ⑦ 「ワンダフルライフ」 ジェイ・グールド

バージェス頁岩から発見されたカンブリア紀の動物たちの研究に関する物語。生物の進化は最初に多様性の爆発があり、後に偶然による絶滅が起きて、種類が減ってくるというモデルを提案しており、慣れ親しんだ進化の樹形図や進化の行進の図は間違いであると断じている。本書ではこのメインテーマに関連して、「最初に化石を発見したチャールズ・ウォルコットは、分類上の誤りをなぜ犯したか？」「生命テープをリプレイした場合、知的生命体の進化は必然か？」など興味深いテーマが語られ、さらに「研究者における研究の時間と行政の時間」「自然科学における階級制」「優秀な学生の確保」など研究者にとって深刻な話も扱われている。しかし、最も魅力的なのは、マルレラ、オパビニア、ハルキゲニア、アノマロカリスなどの古生物の復元のドラマを迫真の図と共に詳細に辿っていく部分で、他ではちょっと見られない専門家による一般人向けの研究紹介である。節足動物の肢の違いが良くわかっておらず、何回か読み直したので、最初の解説部分を読み飛ばさないように注意が必要。ちなみにこの分野は日進月歩で本書の内容はもう古くなっている（ハルキゲニアは逆立ちに復元されている）。また、チャールズ・ウォルコットの偏見同様、グールドも多分に偏見を持っていてこれに研究成果を当てはめていく傾向にある。しかし、これらを全て差し引いても、本書の魅力は減ることがない。グールドには、他にも「フルハウス」があり、こちらの方が進化学者として彼の思想を良く表現しているが、本書のような古生物自体の魅力には欠けている。

#### ⑧ 「破軍の星」 北方謙三

北方謙三の歴史小説は、主人公が皆、超人的に強く、死域を超えた経験を持ち、逆に言うと

ステレオタイプで面白くない。「水滸伝」「楊令伝」「岳飛伝」の大水滸シリーズは、超人同士の戦いが延々と続き呆れるばかりだ(全部読む方も読む方だが、少年ジャンプの大作漫画と同じで、一度読み始めたら惰性で全部読まざるを得ない)。童貫元帥なども、もっと悪の魅力と哀しみに満ちた人物に描くことが可能だったのに、北方ステレオタイプになってしまったのは残念だ。北方ワールドは、実際の歴史とかけ離れたファンタジーになってしまう傾向になるのだが、この人の小説の凄い所は、案外これが歴史の本質なんではないか、と思わせる所がある点だ。例えば大水滸シリーズと「興亡の世界史、モンゴル帝国編」を併せて読むと、楊令の構想した「物流に立脚した世界帝国」は、モンゴル帝国により、ほぼ実現されていることがわかる。また「史記」のラストは中島敦の「李陵」を固定観念として持っていた身としては将に驚愕だったが、案外、李陵や蕪武の心情に近かったのではないかと、思う。南北朝シリーズに出てくる晩年の尊氏も、従来(例えば「私本太平記」の尊氏)と違って「観応の擾乱」の尊氏に近く、これが歴史上の近かったのではないかと思う。

さて、数多い北方歴史モノのうち、最も早い時期に書かれたのが、南北朝時代の南朝側の武将、北畠顕家を描いたこの作品である。主人公は、実際に、若く(若くして戦死した)、イケメン(そのようだ)で、血筋が良く(公家の名家出身で父は親房)、正義の味方(南朝)で、戦争が強く(楠正成はゲリラ戦には強く、赤松円心は戦闘には強いが、大軍を率いてならば南北朝最強ではないか)、北方ワールドにぴったりなので、無理なく読める。顕家は陸奥多賀城に拠点を置き、京都までの遠征を2度に渡って行う。最初は尊氏を九州まで追いやり、二度目も戦術的には完勝する。しかし、トップがダメなのが南朝の問題で、楠正成同様、彼も戦略的に無能な天皇や公家集団のお蔭で報われない戦いの末、戦死する。彼の死後、南朝は没落の一途を辿っていく。顕家を描いた歴史小説はそれまでにほとんどなく、まさに北方謙三にぴったりだったといえる。

#### ⑨「影の現象学」河合隼雄

河合隼雄は、理系の出身で高校教師を経て、スイスのユング研究所で精神分析を受け、帰国後これを広めるために活発に活動すると共に多くの著作を残した。後に文化庁長官になって本人とは何の関係もないキトラ古墳の管理不備問題に巻き込まれ、奔走の最中に倒れてなくなった。本当に気の毒だ。このうち代表作は「精神分析入門」「心の処方箋」なのだが、基本的に主張は一貫しており、ある意味どれから読んでも良い。この影の現象学は精神分析における影の問題に焦点を当てていて、大変分かりやすいので最初に読むならばお薦めである。

ある研究目的に向かって全員が一致協力して邁進する精鋭無比の研究室を作ると、そこには強烈な影が生じ、心を病む学生が続出するだろう。ふんが研が緩く、いい加減なのは、影の害を避けつつ、研究の生産性を維持しながら、学生が成長していくための工夫(半分うそだが)で、この多くは実はこの本に負うところが大きい。

⑩「王家の風日」 宮城谷昌光

膨大な数の宮城谷作品の中でもっとも初期に書かれた本書は、商周革命を描いており、滅んでいく商の王族、其子を主人公に描いている。暴君の代表と言われた紂王は、商に最盛期をもたらした名君であり、炮烙の刑も酒池肉林も祖先の霊に捧げるための宗教的行事の面があった。顔に隈取をした巫女たちが前面に立ち、その目の力で悪霊を払いながら進撃する商の軍団が大迫力で描かれる。先祖の霊、山林の霊、様々な怪異が身近にあった古代人の考え方は奇怪であるが、商の発明した漢字を元に想像力を駆使し、これを見事に描いた所にこの作品の凄さがある。後年の宮城谷作品は徐々にこの面が消えて行って残念である。三国志ファンには、典韋のあだ名の由来となった悪来の活躍が嬉しいかも。同じ時代を周側から描いた「太公望」もお勧めである。釣りをしている老人のイメージからかけ離れた呂望が活躍する。

⑪「鳥に「鳥に単衣は似合わない」 阿部智里

八咫鳥シリーズの第一作。人の姿に変身できる鳥の世界を描いたファンタジーで、斬新な設定にびっくりし、意外な結末に驚愕し、思わず最初のページを読み返し、そこにいかなるインチキもないことを確認した。続編もたくさんあって、どれも面白かったが、後の方のはやや捻りすぎな感じがした。ただし、最近の玉依姫を読んで再び驚愕したので、この人の小説世界は恐ろしい。源氏物語を下敷きにしているので、源氏のストーリーを良く知っている人ほどだまされる。

⑫「ジェノサイド」 高野和明

理系要素が強い小説で、人類の進化、コンピュータによる創薬、不確定性、ゲームを装ったテロなど様々なアイデアが綺羅星のごとくちりばめられている。もちろんご都合主義な所が多く、ツッコミ処は満載なのだが、ストーリーの面白さとアイデアの新しさと最後まで気持ちよく引っ張られる。

⑬「太陽の世界」 半村良

良質なファンタジーにはその世界の言葉がある。「Load of the Ring」のトルキンは自分でオリジナルなエルフ語を作ってしまう、「精霊の守護者」の上橋は、アポリジニの言葉を元としたと思われる独自の言葉を使う。太陽の世界は、古代ムー大陸を舞台とし、キマと呼ばれる超能力を使うモアイと、争いを回避して、理想の大地ラ・ムーを求めて漂泊する民族アムを中心とする大河ファンタジーで、ポリネシア系の言語が使われ、独特の世界に引き込まれる。ムーは遠い昔海に沈んだが、その名残はこの世界にも見られるという設定で、これってもしかして本当にあったことなのでは。と思わせる所が「嘘部」と言われる作者ならではの。モアイと一体化し、ラムーにたどり着いたアムは、聖双生児の指導の下に王朝を築くが、その血筋は必然的に悪魔を産み出す。単純な悪と善の対立ではなく、数多くのキャラ

クタが活躍する壮大な架空歴史物語が展開される。残念なことにこの話は、3代目の王カインの治世で中断し、作者の死によって未完に終わっている。半村良には他に不可触領域、平家伝説、英雄伝説など伝説シリーズ、妖星伝など優れた作品もある。特に妖星伝は、メインアイデアは抜群なのだが、ドメスティックで尻つぼみ感があってもったいない。

#### ⑭「超老伝」中島らも

常に「おむつおむつおむつ」と口走り、言動も風体も怪しい菅原法斎は、ブラジル発祥の武術カポエラの達人で、あらゆるサバイバルテクニクに通暁している。彼の元には、自己啓発セミナー、新興宗教、疑似科学、入れ墨師など様々な世界から様々な問題を持った挑戦者が登場し、これに独自の切り口で対決する。全てが会話だけで進み、地の文が存在しない実験的な手法で書かれた小説。鴨を食べるたびに、ヌートリアを見るたびにこの話を思い出さずにはいられない。「白いメリーさん」「ガラダの豚」などもいいのだが、本作品にこそ中島らもの全てが結集しているといえる。

#### ⑮「ハプスブルグの宝剣」藤本ひとみ

19世紀、華麗な歴史を持つオーストリーのハプスブルグ家は、強大化するフランス、ロシア、新興国プロイセンに挟まれて衰退しつつあった。帝位を継いだマリアテレジアを助けて活躍する隻眼のイケメン、エドゥアルドを描く。彼はプリンツ・オルゲンに才能を見出され、ハプスブルグの宝剣の異名を与えられるユダヤ人という設定だが、実は架空の人物。エドゥアルドは、戦闘にも強いが、超人的というほどではなく、その武器は、情熱、度胸、頭脳の冴え、危機管理能力、戦略、交渉力である。老大国オーストリーは多数の民族の集合体で、官僚機構が腐敗していて機動力がなく、彼の前には困難がいっぱいである。しかも彼は懲りることを知らず、恋愛上の失敗を繰り返し、ライバルのフリードリヒ二世には何度か痛い目に合う。しかし、彼の情熱、野望、行動力は老大国を支える。最後はいかにも続編がありげな感じで終わってしまうのだが、まだ書かれていない。藤本ひとみには、「逆光のメデイチ」「ノストラダムス」があるが、特に前者は凄い設定（ダビンチが女）でちょっと付いていくのが難しい。

#### ⑯「アンドロメダ病原体」マイケル・クラントン

今はジェラシックパークが異様に有名になったマイケル・クラントンの初期の代表作。ふんがは大学生の頃、読んで怖かった。変なものが空から落ちてきてもむやみに手を触れないと誓った。宇宙から有用な微生物を収集する秘密計画によって打ち上げられた回収機がとてつもない病原体を持ってきてしまう。現在のSFで頻繁に用いられる、自動核爆発装置まで、この作品がルーツであったものは多い。最後には謎がすっきり解決し、危機が回避されてめでたしめでたしとなるのだが、落ち着いて考えるとこの人達、何もやっていないのではないか？ということに気付く。この辺は、「スフィア」や「ジェラシックパーク」など後年の作



品にも共通している。もう一つ。大学生の当時、病原体が突然変異するまで泣き続ける赤ちゃんがいるわけではない、と思っていたのだが、後に、案外そうでもない、ということを理解した。

#### ⑰「崑崙遊撃隊」山田正紀

日中戦争の直前、中国の奥地にあるという伝説の崑崙を目指すチームは曲者ぞろい。主人公の藤村は親友の妻を奪ったうえに殺してしまい、仇として付け狙われる身。英会話を学ぶ殺し屋 B.W.、美貌で女を誑し込む少年天竜、馬にしか愛情を抱けない倉田、そして謎の男森の男森田。崑崙にはサーベルタイガーや謎の動物たちが居て、女王がこれを治めるという伝説があるのだが、もちろん誰も信じておらず、崑崙を制することにより中国全土を制するのが目的である。ところが藤村はサーベルタイガーを見てしまい、このためにチームを案内する身となってしまふ。この話の後半は映画のアバターにそっくりである。それぞれ大切なものを守って死んでいったメンバーの遺志を受け継ぎ、主人公は崑崙の怪物たちと共に日本軍に戦いを挑む。この話がアバターを越えていると思うのが崑崙の知性が、水流コンピュータに宿ったとする点で、この発想がすごい。もちろんアバターより 20 年は前に書かれた作品である。山田作品は、玉石混交で、「弥勒戦争」「神狩り」「謀殺のチェスゲーム」「竜の眠る浜辺」「少女と武者人形」など傑作がある一方、愚作も多いので注意が必要である。

#### ⑱「背教者ユリアヌス」辻邦生

歴史小説は、全ての歴史的状況を、主人公をはじめとした登場人物の目からのみ語らなければならない。この作品はこの原則に極めて忠実に、ローマ皇帝ユリアヌスの生涯を誕生から死まで丹念に描いている。かなり以前に書かれたのだが、最近文庫化されたことで、ふんがでも読めるようになった。ユリアヌスは、キリスト教に改宗したコンスタンティヌ大帝の姪の子として生まれる。大帝の後を継いだコンスタンティウスは猜疑心が強く、皇位継承者は次々に粛清されていくのだが、元々野望のないユリアヌスは、彼を守りたい周辺の人々のお蔭で生き延び、副帝として意外な才能を発揮して、ついに皇帝に即位する。古来のローマの神々を信じ哲学を好むユリアヌスは、権力と一体化しようとするキリスト教に違和感を抱き、ついにはこれを抑え込んで古来の宗教の復活を図って周囲と衝突する。純粹、繊細、知的でイケメンなユリアヌスは、なぜか戦いに臨むとびっくりするほどの積極策を取って読者をはらはらさせる。残念なことに、彼は戦闘には強いのに戦略に優れた名将ではなく、ペルシャ帝国との戦いで砂漠に引きずりこまれて兵站を絶たれ、不利な状況の中で壮絶な戦死を遂げる。史的事実に基づき、歴史小説の基本を踏まえた名作だが、キャラクタが単純で主人公に近い方は全てカッコいい善玉、敵役はいかにもそれとわかる悪玉ではっきりしている。コンスタンティウス帝の王妃との恋愛はプラトニックで、彼を慕う踊り子は献身的な純愛を貫き、友人は彼を守って戦死する。この辺の展開は少女漫画に近いのだが、ローマ時代ということもあり違和感なく読める。

⑲「さびしい乞食」北杜夫

北杜夫は、辻邦生の親友で、大長編「背教者ユリアヌス」を意識して、渾身の大作「楡家の人々」を書いた。しかしふんがにはこれが全く面白くなく、軽い「どくとのマンボウシリーズ」を楽しませてもらった。ここでは大人の童話三部作の真ん中の「さびしい乞食」を推薦する。三部作のうち「さびしい王様」は名作だが、孤独なステンコロリン王がかわいそうでならない。またカタカナを追うのが大変である。「さびしい姫君」は自他共に認める愚作である。

「さびしい乞食」は、ニューヨークに乞食武者修行に出された御貫固呂利君と、前作の最後で穴に落ちてニューヨークに出現したステンコロリン王がコンビを組み、麻薬入り？のチョコレートラスベガスまで運ぶ旅に出る。日本の大衆小説のパターンの一つ「宝物の輸送」のお手本のようなエンターテイメントになっている。奇抜なラストもなんとなく考えさせるものがある。北杜夫の童話には、他にも「船乗りクプクプの冒険」があり、ひょっこりひょうたん島から森見登美彦の「熱帯」にまで（多分）影響を与えている。

⑳「クツゥルーの呼び声」 ラグクラフト

ちっとも怖くなく、そんなに面白くもない。全体としていかがわしい雰囲気が漂うのだが、なにがしかの魅力がある。クツゥルーの神々は、ラグクラフトが著作権を放棄し、彼の周辺がその世界感を共有して書き続けることによって、世界的に有名になるに至った。日本でも栗本薫が「魔界水滸伝」の敵役に使っている。少女擬人化され、「はいよれニャル子さん」というのまである。これにはラグクラフトもびっくりしたろう。クツゥルーの神々の話はどれもあまり面白くないのだが、その影響力は大きい。ウルトラ Q の海底原人ラゴンも明らかにダゴンの影響を受けている。逆に最初の作品が名作だったら、このように書き継がれることがなかったのではないか。がれることがなかったのではないか。

㉑「四畳半神話体系」 森見登美彦

ふんがは京都があまり好きでなく、世評の高い「夜は短し歩けよ乙女」にあまり乗り切れなかったのだが、この四畳半モノにはびっくりした。共通のイベントが用意されていて、しかし別のストーリーが展開するパラレルワールドから成る短編集。様々な結末があるロールプレイングゲームに慣れた人にとっては違和感がないのかもしれない。最後の「80 日間四畳半一周」はおそろべきリアリティがあり、閉塞感と恐怖を感じる。最後に蛾の集団発生之谜が解けてすっきりする。猫ラーメン食べたい。

㉒「鹿男あおによし」 万城目学

京都：鴨川ホルモー、大阪：プリンセスとよとみ、滋賀：偉大なるしゅららぼんの関西シリーズはどれも面白いが、奈良を描いたこの作品が一番優れているように思う。研究室のトラ

ブルで奈良の高校に赴任することになった主人公は、不思議な事件に巻き込まれ、ついには「なまず」を封じ込めて日本を救う。学園ものとしても面白いし、古代史ファンにとっても魅力がある。ふんがは黒塚古墳にも行ったことがあったのだが「さんかく」の謎が最後まで分からなかった。

#### ②③「罪と罰」 ドフトエフスキー

ここでは誰もが知っている名作は扱わないことにしているが、これはファンなので例外としたい。三つの訳を読んだが、旺文社の江川卓訳（野球解説者ではない）から入ったため、今でもこれが一番しっくりくる。亀山版も悪くないが評判ほどではないと思う。最も多くの人を読むであろう新潮社版があまり良くないのは残念だ。スタンダードな解説は山ほどあるので、以下、ふんがの完全な私見である。この小説の主人公はスピドリガイロフで、彼は年甲斐もなく、若くて美貌、知的で情熱的な家庭教師のドーニャにすっかり心を奪われてしまう。危険を感じた妻のマルファは、ドーニャが主として兄のためにお金に困っているのに目をつけ、しょもない男のルージンをくっつけようとする。しかし、スピドリガイロフは機先を制してマルファを殺害、ドーニャを追ってペテルブルグにやってくる。そこで、彼はドーニャを落とすためのキーとなる男が兄のロジオンで、彼が単なる金食い虫というだけでなく、とてつもない秘密を持っていることに気付く。スピドリガイロフは、これをネタにドーニャに近づいて求愛するのだが、彼女はマルファからもらったピストルを構えてこれに対抗する。旺文社版のしおりでは、彼のことを、淫蕩を絶対視する悪魔的人物と紹介しているが、彼が求めているのは純粋な愛である。

#### ②④「蘭菊の狐」 西村寿行

おやじが駅の売店で買って電車で読む新聞や週刊誌には、連載小説が載っていて、大概しょもない話である。サービス用にエロシーン、バイオレンシーンが入っていないといけないので、筋に無関係に頻繁に出て来る。西村寿行はこの手の小説が多く、たいがい超人的な能力を持つ一方、影のある男たちが主人公のハードボイルド、バイオレンス小説であまり面白くない。しかし元々才能のある人なので、たくさん書いているうち、時々、ずば抜けたのが出来てしまう。世評の高いのは「君よ憤怒の河を渡れ」で確かに悪くないのだが、ふんがのお勧めはこれである。田舎町を支配する実力者に、兄を殺された少女が、狐、犬、猿と三人の男たちの力を借りて復讐する話。この三人は社会からの脱落者の小悪人で西村寿行の描くいつもの男たちと違って、本当につまらない男たちである。妖狐の雰囲気があるキツネはおろか犬や猿の方が役に立つくらいである。しかし、無い知恵を絞り失敗を繰り返しつつ、少女を助けて形勢を逆転していく。エロシーンを読み飛ばせば、リアリティと幻想が入り混じった詩情溢れた名作と言っていい。

#### ②⑤「銃・病原体・鉄」 ジャレド・ダイヤモンド

なぜ文明はユーラシア大陸に発祥し、ヨーロッパ文明はラテンアメリカ文明を圧倒することができたのかを地政学的に解き明かしている。ユーラシア大陸が横に長く、農業を始めるための作るための作物の原種、家畜や家禽にするための獣や鳥の種類が多かったのが最大の決め手となっている。さらに、この大陸の端にあって複雑な地形を持つヨーロッパが有利であり、人種の違いは関係ないことを膨大な資料によって解き明かしている。「文明崩壊」はこの続編と言って良く、マヤ文明、インカ文明をはじめとして、知らなかったアフリカやポリネシアの文明の衰退の原因が語られる。こちらは途中がかなり退屈。

#### ②⑥ 「あなたの人生の物語」 テッド・チャン

人間の言語がプログラムを含めて順番に物事を記述するのは、人間の思考が逐次的であるからに他ならない。並列処理を記述するための現実的な方法は、プラグマなどで、ここは並列は実行できるよ！と指定してやることだ。しかし、本当は、どのような順番で実行しても良い論理型の記述が最も並列性が高いのではないかと考えて、第5世代コンピュータプロジェクトではLogic Programming、Functional Programmingが検討された。しかし、人間の思考が逐次的なのは時間が逐次的に流れることから来ているのかもしれない。我々とは全く異なる異星人が居て、彼らの思考法、言語が、時間の逐次性に拘束されないものであったらどうだろう。そんな異星人の言語を理解するにつれ、時間の逐次性を失った女性研究者の話。「メッセージ」という映画になり、高く評価する向きもあるが、ふんがは、がんばっている点は認めつつも、ハリウッド映画というものの限界を感じた。本書はいくつかの短編で構成されているが、どの話もオリジナリティが高く、刺激的。

#### ②⑦ 「ドリトル先生航海記」 ヒュー・ロフティン

子供の頃、読んだ印象と違って、後年になって2つのことが気になるようになった。一つが気になるようになった。一つは井伏鱒二の翻訳の凄さ。つは井伏鱒二の翻訳の凄さ。Push-me-pull-you をオシツオサレツと訳したのは凄いとしか凄いとしか思えない思えない。意味が正しく、動物の名前っぽく、ユーモアがある。もう一つはドリトル先生が弟子を確保するときの積極性である。航海記は弟子のスタビンス君目線なので気付かなかったが、先生は、少年時代の彼に偶然会って、内心狂喜し、絶対にゲットすると心に決めたのではないか。ポリネシアは誰にでもできると言っていたが、あれは嘘で、動物語の習得には、観察力、記憶力、繊細な感応能力などの特殊な才能に加えて努力が必要で、そんじょそこらにこのような素質を持つ人は居ないのだろう。先生は、スタビンス少年に才能を見出し、内弟子になることを強く勧め、ついには両親のうちに押しかけて笛まで吹いて説得している。やはり指導教員たるものこれくらいやらないといけないのかも。スタビンス君もこれに良く答えて、数多くの動物語を駆使するまでに成長している。

「秘密の湖」で先生はついに永遠の命の問題に取り組んでいる。ここから先は想像だが、ついに先生は千年の命を持つカメのドロロンコに意識を間借りすることに成功する。ロングア

ローは世界樹に意識と知識を移植する。ここまで地球を破壊した我々のことを彼らはどう考えているだろうか？地球を救うために、彼らが覚醒し、異星人オーソブラッジと共に、驕れる人類に鉄槌を下すのではなからうか。それともいつでも優しくあった先生は、救世主となってくれるだろうか。

⑳「恐怖の 22 時間時間 18 分」 柳田邦夫

スリーマイル島の原子力発電所事故を描いたノンフィクションで、なぜ事故は起こり、どのような経過をたどり、どのような社会的現象を引き起こしたかを丹念に記述している。福島原発事故が起きた後になっては、これを意識しないでスリーマイル島事故を検証することは、日本人にとっては難しい。ところが本書はこの前に書かれたものなので、後に起きる事故と本人にとっては難しい。ところが本書はこの前に書かれたもので、後に起きる事故とその経過を正確に予言している点でも注目される。

チェルチェルノブイリは無理なテストが原因で起き、福島原発事故は津波が引き金になっている。しかし、スリーマイル島の事故は、普通に運転をしていて、作業員の誰もが過失というほどの過失を犯さないにも関わらず、細かい事故が連鎖して炉心溶融招いてしまった。事故の起きた際、システム全体の挙動を把握することができなかつたのが問題だったことがわかる。それだけに米国のこの事故に対する反省は強烈かつ持続的である。

柳田邦夫は、航空機事故調査ノンフィクションでも有名で、「マッハの恐怖」「続マッハの恐怖」「撃墜」などがあり、空の旅のお供におの恐怖」「撃墜」などがあり、空の旅のお供にお勧め。

㉑「バッタを倒しにアフリカへ」 前野ウルト浩太郎

昆虫記、冒険記として優れているだけでなく、研究費を確保し、本業のバッタが見つからない時、別の虫で論文を書いたりする「研究者小説」としても優れている。なんといっても好きなことが研究に繋がり、それがダイレクトに人のためになるのは素晴らしい。ふんがも好きなことが研究に繋がっているのだが、今イチ、ダイレクトに人の役に立ってない感じがして、この辺、バッタの研究に負ける気がする。とはいえ、この種の研究にも資金をちゃんと出せる京大の「白眉プロジェクト」はうら資金をちゃんと出せる京大の「白眉プロジェクト」はうらやましい。慶應ではなかなかこういうことはできない。

㉒「日本の伝説・昔話 12 か月」 松谷みよ子

日本人必読、などという本があるわけないのだが、仮にあるとすればこれではないか。日本の伝説、昔話が丹念に、創作を入れず採集されている。一部、忘却されてわからない部分などそのままの形で出てくるし、重複を恐れないので、似たような話がいくつも出てくるが、これもまた面白い。特に 12 か月のうち、9 月の化け物寺、茸の化け物の一連の話がいい。この辺を読んで日本人の基本教養として身に着けておけば、茸の化け物に襲われた際も、ナ

ス汁で応戦することができる。

③①「甲賀忍法帖」 山田風太郎

山田風太郎の小説で凄いのは、①奇想天外な基本アイデアと、②複雑に入り組んだ状況をいとも簡単に説明してしまう説明能力である。これは二つ共に、研究者には必須の才能で、小説を読むたびに感嘆すると共にうらやましく思ってしまう。時にアイデアをはずすと愚作ができることもあるのだが、多くの作品のうちのほとんどにびっくりするようなアイデアが入っている。忍法帖シリーズは特に優れていて、ふんががランキングを付けるならば1. 風来忍法帖、2. 魔界転生、3. 柳生十兵衛死す の順になる。しかし、の順になる。しかし、これらはどれも長いので、最初に読むならば「甲賀」ではないかと思う。この作品は、甲賀対伊賀の忍者による多対多のグループ戦で、しかも勝つ方があらかじめわかっているという設定。互いにそれぞれの必殺技が通じない相手が居て、人数を減らしあっていくのだが。一人「これはずるいのでは」というのが居て、バランスが崩れはじめる。この辺の展開は日本のエンタメ小説の典型パターンで多くのアニメ（多分鬼滅の刃にも）にも影響を与えている。

③②「ソラリス」 スタニフワフ・レム

2つの衛星を持つ惑星ソラリスの海は、それ自体が知性を持ち、重力を制御することで惑星の破滅を防いでいる。人類はこれとコンタクトしようとするが、どのような方法でも不可能で、意味のある交流をすることができない。しかしある時、ソラリスの海は、滞在する科学者に対して「客人」を差し向ける。最近の文庫版は、は、オリジナル（ポーランド語）からの翻訳で、海の変化パターンに関する執拗な描写と、ソラリス学の話が載っていて面白いが少し飽きる。ずっとソラリスに居て客人と共に海を見て暮らしたいと暮らしたい、と思う読者は、実は多いのではないか。ちなみに、森見登美彦の「ペンギンハイウェイ」はソラリスの見事な換骨奪胎であると思う。

③③「豊穰の海」 三島由紀夫

4つの関連しつつ独立した小説群で構成されている。「春の雪」で恋に走って恋に走って20歳で死んだ清顕は転生を繰り返し、その都度、友人の本多と邂逅する。「奔馬」では純粋なテロリスト、「暁の寺」ではシャムの王女、「天人五衰」では貧しい信号手。それぞれの話で、主人公があくまで若くて美しく純粋で情熱的なものに対して、哀れな哀れな本多君はどんどん老醜をさらして行く。⑨の影の現象学に出てくる「永遠の少年」がずばりそのまま当てはまる。最後に「転生」すら劣化する事態に直面した本多は死の影を引きずりながら、「春の雪」で清澄と恋に落ちたで聡子に会いに行く。会いに行く。残念なことにこの小説のラストはやや唐突で説明不足。三島由紀夫は、この小説を十分推敲しないうちに、自衛隊に突入して割腹自殺を遂げてしまった。彼の小説はとても面白いのと、全然共感できないのとあるが、

前者は「盗賊」「午後の曳航」「音楽」などでお勧め。

③④「死霊狩り ゾンビーハンター」 平井和正

A.ロミオ監督のNight of the living deadの前に書かれた話で、ここに出てくるゾンビは、数を頼んでノロノロ襲ってくる連中ではなく、一人であつという間に特殊部隊を全滅させるほど強力。宇宙からの生物が憑依するので、どちらかというインベーダーもの。レーザーの田村俊夫は、事故がきっかけで、過酷な訓練を経て、ゾンビーハンターの一員となり超人的な能力を身に付け、仲間の林石隆、ライラと共に敵に立ち向かう。三作シリーズになっているが元は漫画の原作を大人向きにしたものなので、すらすら読める。主人公はストイックだが性格的に脆く、正義と悪の価値観が途中で鮮やかに逆転する。ヒーローものが好きな中学生にお勧めかも。この作者には他にも漫画原作系の優れた作品があるが、これが一番のように思う。

③⑤「墨攻」酒見賢一

中国の戦国時代、諸子百家の一つ「墨家」は、兼愛を重んじ弱きを助け、強きをくじく理想主義を掲げる一方、リアルな技術と鉄の掟を誇る戦闘集団である点で異色を放っている。特に城塞の守備を得意とし「墨守：固く守って譲らないこと」という言葉を残した。この小説では、城塞の守備の戦闘指導に送られた墨家のきょし（導者指導者）の奮闘を描き、短く良くまとまっている。映画化もされている。

酒見賢一は、孔子とその弟子の顔回を描いた「陋巷に在り」が面白く、この一巻の峡谷の会（漢字が出ない）の部分を読んで本当びっくりした（孔子の生涯でこの事件は謎として知られている）。しかしこの作品は、しかしこの作品は、残念なことに、途中で敵キャラの子蓉が「ラオウ化」してしまい、その死後大幅にテンションが下がる。「泣き虫弱虫諸葛孔明」も最初は抜群に面白いが途中で割と普通の三国志になってしまう。

③⑥「観応の擾乱」 亀山俊夫

太平記の最後の辺で、非業の死を遂げた南朝方の武将たちが天狗となって集まって、北朝を呪うシーンがある。足利幕府の成立後、重臣の高師直と將軍の弟の直義との不和が発端で、將軍尊氏と義詮、幕府有力武将、地方に展開する直冬と南朝方懐良親王らがからんでそれこそぐちゃぐちゃな戦いになるのだが、当時の人には「天狗の呪い」としか思えな」としか思えなかったかもしれない。この観応の擾乱を丁寧に解きほぐして解説してくれるのがこの「観応の擾乱」で、やや先に売れた呉座勇一作「応仁の乱」に比べて読みやすい。（応仁の乱の方は何回か読み返さないと分からない。これがベストセラーになった日本ってすごい）。特に尊氏による直義毒殺疑惑を一蹴しているのがいい。直義の死後、尊氏が戦争に政治に生き生きと活躍しているのがわかる。

③⑦ 「ペスト」 アルベルト・カミュ

アフリカの港町を襲ったペストにより、まずネズミが、次に人が死んでいく。町は閉鎖され、入ることも出ることもできない。町の町の医者、科学者、宗教家、役人、無神論者がそれぞれの立場から疫病との戦いを開始する。もちろん特效薬があるわけではないので、消毒、看病、看取り、死体の始末、統計処理をひたすら繰り返すのだ。そのうちすのだ。そのうち主要人物は自身が罹病して次々に死んでいく。恐ろしいストーリーが淡々と描かれ、逆に感動的。特に孤独な老官吏グランのエピソードが良い。彼が死亡フラグを林立させていながら生き残った所から、ペストは終息に向かっていく。カミュは「異邦人」が有名だがこちらの方がずっと面白い。ふんがも凄い論文を書いて「諸君、脱帽」と呼ばれたい。

(この作品は2020年のコロナ騒ぎで、注目され、本屋に平積みになった。皆にお勧めしたい良書だが、コロナとペストでは致死率が全然違うことに注意が必要だ。)

③⑧ 「隼別王子の叛乱」 田辺聖子

「新・源氏物語」などの読みやすい源氏物語、「むかし・あけぼの」や「私本・源氏物語」「落窪物語」など軽妙な歴史ものを楽しませてもらっているのだが、実はとんでもない本格歴史小説を書いている。敵役は、大サザキこと仁徳天皇、あの大山古墳を築いたと言われる大王である。この大王に言い寄られた女鳥姫は、恋人の隼別王子と叛乱に立ち上がるが、しょせんは器量と実力が違ってあっさり潰される。さらに、これにはネクストジェネレーションも付いていて、全編の主人公が大サザキの妻の磐井姫であることが明らかになる。古事記に通じている人ならば、元ネタが意外な場所で使われてあることがわかってその都度感嘆するだろう。

③⑨ 「雍正帝—中国の独裁君主—」 宮崎市定

康熙、雍正、乾隆帝は名君揃いの清朝皇帝のうちでも粒ぞろいの三人で、「三世の春」と呼ばれる。中国史の碩学宮崎先生がフィーチャーしたのは、このうち最も目立たず、治世も短い雍正帝で、彼に中国の独裁皇帝の完成形を見ている。彼は本気で広い全土を一人で治めようとし、優秀な官僚を選んで任命し、その報告書に逐一赤を入れ、嘘がないかを複数の情報源で確認する。厳しい監視社会を作った独裁者の一面、多少問題があっても育てていこうとする姿勢が際立っている。この時代に女真族の統治は盤石のものとなり、次の黄金時代の基礎を作る。しかしもちろんこの方法にはムリがあり、14年の治世の後、過労死してしまう。

「太子密建」などを考えた優れたアイディアマンでもあり、逆らうものには議論を挑み、血なまぐささを嫌った点でも好感が持てる。宮崎先生は、水滸伝の宋江が二人居た説や、中国王朝景気連動説点など面白い説を唱えていらっしゃる。

④⑩ 「荒神」 宮部みゆき

怪獣映画はやはりゴジラのパターン（シンの方ではない）が基本だと思っている。1.登場前



には謎で引っ張る、例えばショックで記憶喪失になった人が出てきたりする（これはラドンの方か？）、2. 怪獣はただボーっと出現するのではなく、人間の「悪」が関与している 3. 通常兵器による攻撃は致命的なダメージを与えることができない。4. 怪獣を倒すには主人公が命を投げうたなければならない。この作品は基本パターンが全て尽くされ、破綻なくまとまっており、怪獣小説の金字塔と言って良い。人間の殺戮能力は少々の怪獣ならば簡単に倒す位進歩しているため、この小説の舞台は江戸時代で、隣り合う藩同士のいさかいが一つの背景になっている。まじめな筆致ながら、ちゃんと怪獣登場時には見栄を切るシーンもあるし、定番の変身シーンなどもあり、作者が楽しんでいる様子が感じられる。宮部みゆきは多作ではずれがないが、ふんがとしては、いまいちしっくりこないものが多く、これを一番に推しておく。

#### ④① 「死神の精度」 伊坂幸太郎

ここに出てくる死神は、ここに出てくる死神は、J-PoP が好きで、出現時はいつも雨、直接人を触ると気絶してしまうので、常に手袋をしている。急死する運命の人に一週間だけ付き添ってその判定をする。この死神が様々な死にゆく人々に付き添う連作。伊坂作品は世評も高く、確かに面白いのだが、捻りすぎで、こじらせ過ぎに感じてしまう。しかし、この作品は奇妙な感じと、情感が混ざり合って悪くない。人は年を取るが死神は取らない。この連作ではこの時間差を利用する仕掛けがしてあり、最終話に結実する。続編の「死神の浮力」は長編のため、ややくどい感じがする。

#### ④② 「用心棒日月抄」 藤沢周平

東北の小藩の政争に巻き込まれ、江戸に落ち延び、用心棒で糊口をしのぎながら、討手と戦う剣の名手、青江又三郎が活躍する連作。あまりに好評だったため、いくつも続編が書かれているが、やはり第一作が最も面白い。①藩からの討手と戦う、②本業の用心棒稼業で起きる謎を解決する、の他に、なぜか③吉良屋敷を狙う赤穂浪士の動きが絡んで大変である。しかしさすが、藤沢周平、抑えた筆致で、この三つの絡みが見事に語られ、上質の時代小説になっている。

#### ④③ 「吸血鬼ドラキュラ」 ブラム・ストーカー

ホラー小説というよりも冒険小説で、現在の吸血鬼モノの原典だけあって、今でも面白く読める。前半はドラキュラ城に招かれたジョナサン・ハーカーが、危機一髪で脱出するストーリーだが、後半は純粋にドラキュラ狩りになる。ちなみに、ドラキュラ上陸時の幽上船のエピソード以外はあまり怖い部分がない。ドラキュラサイドから見ると、うっかり美女のルーシーを噛んだばかりに、その婚約者と求婚者×2＋ハーカー夫妻、ヘルシング教授から成るドラキュラ狩り隊から付け狙われることになる。なんだかちょっと気の毒である。

④④ 「紙の動物園」 ケン・リュウ

ケン・リュウとテッド・チャンどちらが好きかというので読者の傾向がわかる。両方共素晴らしいが、ふんがは②⑥テッド・チャンの方が好きだ。こちらの方がアイディアのオリジナリティ、ストーリーの切れ味がいいためだ。しかし、ケン・リュウのSF（ファンタジー）は、かわいく、抒情性に優れている。特にこの紙の動物園は、紙の動物たちがリアルで可愛い。最後に紙であり、書くことでメッセージを伝えることができるという当たり前の機能を発揮する。もう一つの短編集「もののあわれ」は、SFとしては平凡だが、何か心に引っかかる作品が多い。「良い狩りを」は特にお勧め。

④⑤ 青葉繁れる 井上ひさし

すでに時代小説として読むことができる終戦直後の仙台の高校生の青春物語。主人公の稔は仙台の料亭の息子で、ジャンナリ、ユッへ、デコとグルーとグループを組んでいるのだが、ここに料亭一番の美女多香子ねえさんの弟の俊介が名門日比谷高校から転校してくる。しかし、彼も実は学力的には落ちこぼれで、グループに混じって様々な騒動を巻き起こす。しかし、ここに登場する先生達は、校長のチョロ松をはじめとして、皆、軽薄に見えて実はかなり立派な人物が揃っている。校長殴打事件、看板窃盗事件が原因でチョロ松校長は辞任してしまうが、主人公たちの成長に大きく手を貸す。井上ひさしの作品は「吉里吉里人」「ドン松五郎の一生」などどれも面白いが、怪作「他人の血」が凄い。心底驚いた。ただし、これは全面下ネタであるので注意。

④⑥ 三体 I・II

シリアスな部分もありエンタメ的要素も持つ本格長編SFで、どこを語ってもネタバレの危険性がある。本書の凄さは、細部に宿るアイディアのオリジナリティであるので、何も先入観なしに読むのが良い。ちなみに本書中の3Dゲームの中で、フォンノイマンと始皇帝が組んで動かす人間コンピュータについては、ふんがも「誰にもわかるデジタル回路」の漫画版の原作を考えた時、似たような概念を考えた。ANDゲート、ORゲート、XORゲートを厳しそうな女の子、緩そうな女の子、へそ曲がりな女の子に擬人化し、皆が手を繋いで1か0を伝えるというアイディアである。描くのが大変な割に本質を突いてないのでやめましょう。ということになった。ま、ごもつともである。